

社会の諸課題の解決策を考える生徒が育つ社会科学学習

名古屋市立伊勢山中学校教諭 大塚基央

I 研究のねらい

私は、社会科学学習を通して、「社会の諸課題の解決策を考える生徒」を育てたい。私が考える「社会の諸課題の解決策を考える生徒」とは、社会の諸課題の解決策を考えるために、自ら学び方を考えて学習を進め、多面的・多角的に考察した上で、より望ましい解決策を選択・判断することができる生徒である。

令和5年に出された「ナゴヤ学びのコンパス」では、「子どもたちが学習に見通しをもち、学習の状況を振り返り、調整しながら学習を進めていくことができるようになることは、将来の仕事や日常生活についても自分で調整し、豊かで幸せな人生を実現することにもつながるため、とても大切なこと」と、自分に合ったペースや方法で学ぶことの大切さが述べられている。さらに、「学びの目標を基に学びの計画を立てることを子どもたちに委ね、子どもたちが自分で決めた学び方を実行する機会を存分に保障する」とあり、学びの計画を立てる必要性についても述べられている。

また、平成29年に示された中学校社会科学学習指導要領の目標には「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」と述べられており、多面的・多角的に考察することが重要視されていることが分かる。

昨年度の実践では、一部の生徒は社会の諸課題の解決策を考えることができたが、解決策を考えることができなかった生徒もいた。それはなぜか考察すると、そもそも生徒自らが主体的に学び方を考えて学習を進めておらず、それが要因で社会の諸課題の解決策を考えることができていないためであると考えられる。

令和元年5月に示された「OECD 学びの羅針盤 (Learning Compass) 2030」には、自ら主体的に計画を立て、振り返りながら、様々な視点から考えた上で、より望ましい解決策を選択・判断する力を身に付けることの重要性が指摘されており、本研究では、主体的に学びながら、よりよい社会の形成者の育成に迫る点においても意義があると考えられる。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立伊勢山中学校 第2学年 36人

2 基本的な考え

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の小倉勝登氏は、自分に合ったペースや方法で学ぶ上で、問題解決的な学習過程の充実や単元で考えることが重要であると述べている。そこで本研究では、学習課題を捉え、学習計画を立てるための「課題を捉える」段階、自ら学習を進め、討論を行う「考えを広げる」段階、これまで学んだことを整理し、自らの最終的な考えを記述する「考えをまとめる」段階に設定し、それぞれの段階の学習を次のように進めるようにした【資料1】。

段階	主な学習活動
課題を捉える	<ul style="list-style-type: none">○ 社会的事象に出会い、学習課題を設定する。○ 自らの現状を把握し、調べることを明らかにする。○ 学習課題の解決するための学習計画を立てる
考えを広げる	<ul style="list-style-type: none">○ 計画した学習計画に沿ってそれぞれで取り組む※ 学習計画はその都度修正してもよい○ 討論のために、自分の考えをまとめる○ 選択肢ごとに分かれて全体で討論をする
考えをまとめる	<ul style="list-style-type: none">○ 討論で出てきた意見を踏まえて、学習課題に対する最終的な自分の考えをまとめる。○ 学習全体を振り返り、次の学習に生かしていくことを考える。

【資料1】 基本的な学習の流れ】

(1) 課題を捉える段階

まずは、必要な基本的知識を得る。そして、生徒が社会的事象に触れたときに生じた疑問や生徒が将来直面するであろう諸問題を踏まえた学習課題を設定し、学習課題に対する自らの考えを記述する。

次に、学習課題の解決に向けて、学習計画を作成する。生徒はまず、自分自身は何を理解できていないのか、現状の学習状況を確認する。そして、学習すべきことを明確にした上で、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を立てる【資料2】。「課題解決系ロシート」は、生徒自身の学習状況に応じてプリントを取捨選択し、取り組むことができるシートである。思考ツールを使い、様々な面や立場から考えるためのシートや討論活動に向けた準備をするシート、資料から根拠や解釈を考えるシート等を複数枚用意し、生徒は「課題解決系ロシート」を取捨選択し、学習課題の解決に向けた学習計画を個々に作成できるようにする。



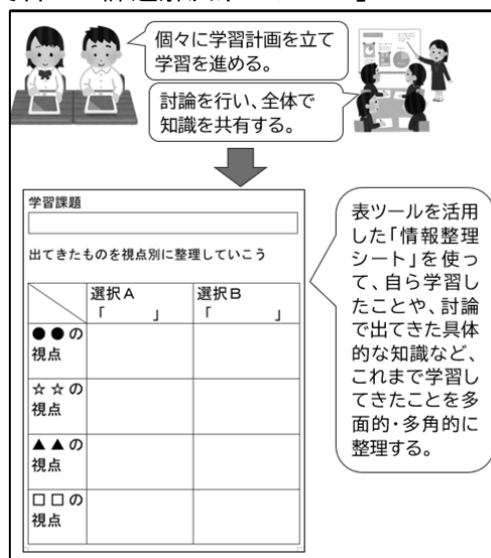
【資料2 課題解決系ロシート】

(2) 考えを広げる段階

課題を捉える段階で作成した学習計画に沿って、個別学習や協働的な学習を進める。毎時間の授業の終わりにまとめと振り返りを記述する。まとめでは、学んだことや学習課題に対する考えの変化を記述する。振り返りでは、学習を振り返り、学習の進め方や今後の学習計画の修正などを記述していく。このような活動を繰り返しながら、生徒は自らの学習を調整しながら追究を進め、最後には選択肢ごとに分かれて学級全体で討論を行う。

(3) 考えをまとめる段階

考えをまとめる段階は、多面的・多角的に考察した上で、学習課題に対する解決策を選択・判断することをねらいとする。そのために「情報整理シート」を活用する【資料3】。「情報整理シート」は、表ツールを活用し、様々な面や立場の視点から整理ができるシートである。このシートを活用し、自ら学習したことや、討論で出てきた具体的な知識を多面的・多角的に整理していく。その後、課題に対して最もふさわしい選択肢を判断し、単元レポートに記述する。



【資料3 情報整理シート】

3 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「課題を捉える」段階において、「課題解決系ロシート」を活用することは、学習計画を立てる上で有効か、生徒の学習計画からつかむ。
- (2) 「考えをまとめる」段階において、「情報整理シート」を活用することは多面的・多角的に考察する上で有効か、単元レポートの記述からつかむ。

Ⅲ 生徒の実態

- 1 調査日 令和5年6月11日
- 2 調査方法 質問紙と授業の記述分析
- 3 調査対象 名古屋市立伊勢山中学校第2学年 36人
- 4 調査の結果と考察

(1) 学習課題を解決するための学習計画を立てることができるか。

単元「日本の諸地域 中国・四国地方」において、「中国・四国地方の過疎を止める最も有効な方法は何か?」という学習課題を設定し、学習課題を解決するための学習計画を作成した。記述内容を分析すると、学習計画を立てることができた生徒は36人中26人であった。一方で、学習計画を立てることができなかった生徒は36人中10人であった【資料4】。

また、質問紙で、「①学習課題を解決するための学習計画を立てることができるか。」「②学習計画後、自ら意欲的に学習を進めることができるか。」と問い、その人数をクロス集計すると右のような結果になった【資料5】。この結果、「学習計画を立てることがどちらかというといけない」「学習計画を立てることができない」と回答した生徒が、学習計画を立てた後も意欲的に学習を進めることができていない実態が分かった。この実態から、学習計画を立てるための手立てが必要であると考えた。

(2) 社会の諸課題を多面的・多角的に考察して考えることができるか。

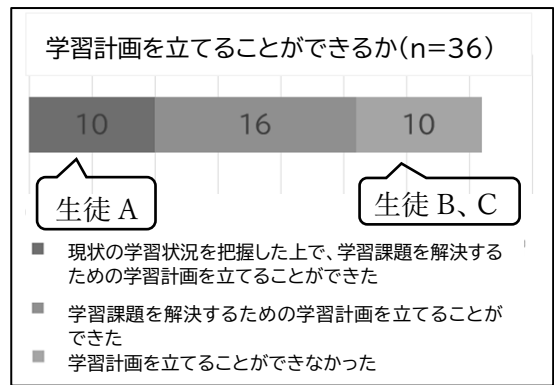
単元「日本の諸地域 中国・四国地方」の単元のまとめを記述した際の生徒の考え分析した結果、36人中16人の生徒が多面的・多角的に考察した上で自分の考えを記述することができなかった【資料6】。このよ

うな実態から、多面的・多角的に考察することができるような手立てが必要であると考えた。そこで本研究では、自ら学習したことや討論で出てきた知識を立場ごとに分け、整理できるシートを活用し分類することで、学習課題を多面的・多角的に考察できるようになると考える。

Ⅳ 第1次授業研究（6月）

- 1 単元 日本の諸地域 関東地方
- 2 目標

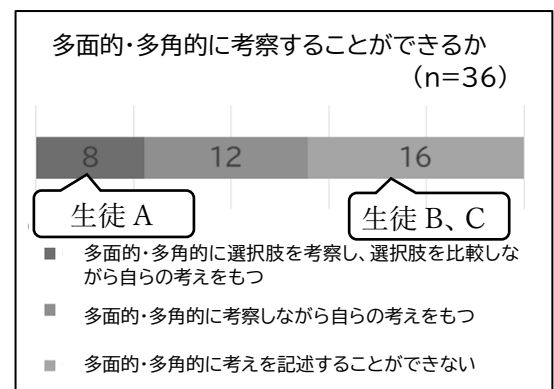
関東地方について、東京大都市圏の人口集中に着目して、人口が集中する理由を、地理的条件や空間的相互依存作用等から捉える。また、東京大都市圏の人口集中に対して、多面的・多角的に考察し、よりよい関東地方の在り方について考えることができるようにする。



【資料4 学習計画を立てることについて】

① 学習計画を立てることができる	できる	5人 (生徒 A)	2人	1人	
	どちらかという とできる	5人	13人	1人	
	どちらか という とできない		1人	6人 (生徒 B)	
	できない				2人 (生徒 C)
		あてはまる	どちらか という あてはまる	どちらか という あてはま らない	あてはま らない
② 学習計画後、自ら意欲的に学習を進めることができる					

【資料5 学習計画とその後の学習意欲の意識調査】



【資料6 多面的・多角的に考察することについて】

3 検証項目

- (1) 「課題を捉える」段階において、「課題解決系ロシート」を活用することは、学習計画を立てる上で有効か、生徒の学習計画からつかむ。
- (2) 「考えをまとめる」段階において、「情報整理シート」を活用することは、多面的・多角的に考察する上で有効か、単元レポートの記述からつかむ。

4 単元の概要（9時間完了）

段階	学習活動
課題を捉える	第1～3時 <ul style="list-style-type: none"> 単元で学習すべき基本的知識を得る。 学習課題を提示し、学習課題に対する今の自分の考えを明らかにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 【単元を貫く学習課題】 東京大都市圏の人口集中は避けるべきか？ </div> 選択肢A「集中しても良い」 選択肢B「避けるべき」 <ul style="list-style-type: none"> 自らの学習状況を把握した上で、課題解決系ロシートを活用し、学習課題を考えるための学習計画を立てる。【検証場面1】
考えを広げる	第4～7時 <ul style="list-style-type: none"> 個々に立てた学習計画を基に、個別学習や協働的な学習を進めていく。 選択肢ごとにグループに分かれ、全体で討論をする。 学習課題の解決策を考える上で、影響が大きい立場を学級で共有する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 【立場】 大都市圏の人々 他の地方の人々 大都市圏の産業 他の地方の産業 </div>
まとめる	第8～9時 <ul style="list-style-type: none"> 自ら学習したことや、討論で明らかになった具体的な知識を立場ごとに情報整理シート分け、整理をする。【検証場面2】 学習課題に対して、最もふさわしい選択肢を選び、単元レポートに自分の考えを記述する。

5 学習の概要

(1) 検証場面1 第3時

第3時は、学習課題「東京大都市圏の人口集中は避けるべきか？」を考えるための学習計画を作成した。まず、生徒に「集中してもよい」のか「避けるべき」か、選択した理由を記述させた。その後、「調べたいこと・理解したいこと・疑問に思うことなど」は何かを記述した。前単元ではこの後、学習計画を立てたが、10人の生徒が立てることができず、その後の学習にも影響したため、本単元では「課題解決系ロシート」を示した。

課題解決系ロシート

学習計画

第2時

- 課題解決系ロシート④で人口集中のメリットとデメリットを調べる
- 課題解決系ロシート①で関東地方の自然環境を理解する
- 課題解決系ロシート③で自然災害が起きた時の被害の大きさを調べる

第3時

- 課題解決シート①で日本の首都東京の役割について理解する
- 課題解決シート①で交通網を利用した産業を理解する
- 課題解決シート①で世界との結び付きを理解する

第4時

- 課題解決系ロシート③で郊外の高齢化少子化、過疎などについて調べる
- 課題解決系ロシート⑥で反対意見と自分の主張について書く

【資料7 生徒Aの学習計画】

生徒Aは、学習課題を考えるための学習計画を自らの調べたいこと・理解したいこと・疑問に思うことなどの現状の学習状況を踏まえつつ、課題解決系ロシートを基に学習計画を立てることができた。授業の振り返りでは、「学習課題を考えるための学習計画を立てることができた。今後はこの計画に沿って進めていきたい」と、記述した【資料7】。

生徒Bは、「課題解決系ロシートを基に学習計画を立てることができた。しかし、現状の学習状況を踏まえることはできなかった。また、授業の振り返りでは「学習計画がいつもより立てやすかった。」と記述した。

生徒Cは、「課題解決系ロシート」を基に、2時間分の学習計画を立てることができたが、3時間目の学習計画を立てることができなかった。授業の振り返りでは「『課題解決系ロシート』は今後の学習にも便利そうだが、多くてどれを使えば良いか迷ってしまった。」と記述した。

(3) 検証場面1の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題を考えるために、現状の学習状況を理解し、学びたいことを取り入れながら、「課題解決系ロシート」を基に、学習計画を立てることができる。	学習課題を考えるために、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を立てることができる。	学習課題を考えるための学習計画を立てることができない。
32人		
12人 (生徒A)	20人 (生徒B)	4人 (生徒C)

生徒Aや生徒Bのように、学習課題を考えるために、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を立てることができた生徒は36人中32人だった。これは、「課題解決系ロシート」を提示したことで、課題解決のために何をすることが明確になり、生徒が学習課題を考えるための学習計画を立てることができたためであると考えられる。

一方で、生徒Cのように、学習課題を考えるための学習計画を立てることができない生徒は36人中4人であった。この4人を分析してみると、3時間中の2時間は学習計画を立てることができていたが3時間目の計画を立てることができていなかった。これは「課題解決系ロシート」の種類が多く、どのシートを使えば良いか迷ってしまったためであると考えられる。

(4) 検証場面2 第8時

第8時は、これまでの学習や討論で出てきた具体的知識をまとめるために「情報整理シート」を活用した。視点を「大都市圏の人々」「他の地方の人々」「大都市圏の産業」「他の地方の産業」とし、「集中してもよい」のメリットをピンク色、青色の付箋は「避けるべき」のメリットを青色、それぞれのデメリットを黄色の付箋に色分けして整理した。

生徒Aは、第7時の自らの考えを記述した際、経済や人々の暮らしや災害を踏まえて、多角的に考えることはできたが、大都市圏に住む人々の視点や他の地方の人々の視点など、多角的に考えることはできなかった。しかし、この「情報整理シート」作成後には、多角的・多角的に考察した上で記述することができた。

生徒Bは、第7時の記述では経済の面でのみ記述していた。また、多角的な視点は記述されていなかった。「情報整理シート」の作成することで、その後の単元レポートでは、「過疎対策」「災害」「過密対策」の面や「過疎地域の人々」「大都市圏の人々」など多角的な視点で記述することができた【資料8】。

	選択肢A「集中してもよい」	選択肢B「避けるべき」
大都市圏の人々の視点	交通機関が整っている 交通渋滞が起きやすい 地価が高い	犯罪件数が少なくなる 交通渋滞が減る 今より産業が発展しなくなる
他の地方の人々の視点	狭い範囲に集中することで一単位あたりの共通費用を低下させることができる 過疎地から集まるから過密化がどんどん進む	犯罪件数が少なくなる 交通渋滞が減る
大都市圏の産業の視点	世界と争うことができる 過疎地域が衰退する	大都市圏での産業が衰える
他の地方の産業の視点	交通渋滞が起きやすい 物流コストの削減	過疎地域での産業が発展する

【資料8 生徒Bの情報整理シート】

生徒Cは、第7時の記述では、近郊農業の面でのみ記述していた。また、多角的な視点は記述されていなかった。「情報整理シート」の作成時には、多面的・多角的な視点で情報を分類することができていた。しかし、その後の単元レポートでは、近郊農業、経済面、交通面、災害面の多面的な視点から記述することはできたが多角的な視点では記述することができなかった【資料9】。

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>第7時 集中してもよいと思う。なぜなら<u>近郊農業</u>は、人がたくさんいてこそメリットのある農業だからです。</p> </div>
情報整理シート活用後 多面的な視点… 多角的な視点… □
<div style="border: 2px solid black; padding: 5px;"> <p>集中してもよいと思う。東京大都市圏に人が減ると、<u>近郊農業</u>が衰退してしまうデメリットがある。それに、人がたくさんいたほうが<u>海外からの輸入する場所として適していたり</u>、電車がすぐに来るように<u>交通の便</u>が良かったりといいいことがたくさんあるので集中してもよいと思った。しかし、<u>災害</u>の面からすると東京大都市圏の人口集中は問題であるとも思った。</p> </div>

【資料9 生徒Cの第7時の記述と情報整理シート後の記述の変化】

(5) 検証場面2の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題に対するそれぞれの選択肢を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができる。	学習課題に対して、自ら選択した選択肢を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができる。	学習課題に対して、多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができなかった。
30人		
12人 (生徒A)	18人 (生徒B)	6人 (生徒C)

生徒A、生徒Bのように、学習課題に対して自ら選択した選択肢を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを記述することができた生徒は36人中30人であった。これは情報整理シートでこれまでの学習を視点ごとに分析したことで、より情報が整理され、分かりやすくなったためであると考えられる。

一方、生徒Cのように6人の生徒が学習課題に対して、多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを記述することができなかった。これらの生徒の中には、「情報整理シート」に多面的・多角的に情報を整理しているにもかかわらず、単元レポートでは、多角的・多面的に自らの考えを記述することができていなかった生徒がいた。これは、「情報整理シート」に整理した情報が多くなりすぎたため、何が大切なのか分からなくなってしまったためであると考えられる。

V 長期研修で学んだこと

1 関西学院初等部教諭 宗實 直樹 氏

宗實直樹氏は、個別最適な学びの実践を数多く実践されている。学習計画を作成する前に学習の必要性を子どもが理解することで、主体的に学習に取り組むことができるようになることを教えていただいた。単元を貫く学習課題に対して、個別に立てる問いは難しく、生徒にとってはハードルが高く感じるため、何を調べるかを選択させたり、調べる方法を選択させたりすることも個別の学習である。また、個別の学習を行う際には一つ一つプリントに使う目的を生徒は理解する必要があると教えていただいた。

以上の指導・助言を踏まえ、第2次授業研究では、生徒が学習計画を立てることができるようにするために生徒に学習する必要性を問い、学習する目的が理解できるようにしていく。また、学習計画を立てる際には、生徒にとってプリントを使用する目的が明確になるように、目的に応じて学習プリントを分類していく。

2 東京学芸大学附属竹早中学校教諭 内藤 圭太 氏

内藤圭太氏は、単元レベルでの問いに基づいて社会科授業をつくる重要性を述べており、日頃から実践をされている。内藤圭太氏によると、問いには構造図があり、本質的な問い、中心発問、下位の問いの3階層から成り立つとされている。また、探究学習においては、仮説を生み出して議論を求める問いを中核に設定することが重要であり、「なぜ」「どうして」という問いを中心発問として設定する必要があると教えていただいた。また、手立ての「情報整理シート」をより活用するためには、その後の単元レポートを別のプリントに分けるのではなく、1枚にまとめることで、より「情報整理シート」が生かされる。さらには、情報を整理した後に、ランキング形式などで、どの情報が重要なのかを選択することで、より「情報整理シート」が活用されるのではないかといた御指導をいただいた。

以上の指導・助言を踏まえ、第2次授業研究では、「情報整理シート」と単元レポートを別のプリントに分けるのではなく、1枚にまとめることや、情報を整理した後、ランキング形式で情報の重要度を考えることで、より活用しやすいようにしていく。

その他、広島大学教授の草原和博氏、敬愛大学教授の市川洋子氏にも御指導いただいた。

VI 第2次授業研究に向けての改善点

- 学習計画を立てる際に、「課題解決系ロシート」を目的に応じて分類したものを提示することで、調べたいことや理解したいことに応じた適切な「課題解決系ロシート」を選択できるようにする。
- 「情報整理シート」で情報を整理した後に、どの情報が重要かを考えるために「誰にとって、どの情報が重要か」ランキングを作成することで、学習課題に対する自らの考えを多面的・多角的に考察できるようにする。

VII 第2次授業研究（10月）

1 単元 日本の諸地域 中部地方

2 目標

中部地方の産業が発展している要因を地域の地理的条件や他地域との結び付き等から捉え、産業発達の要因について多面的・多角的に考察することで、今後の中部地方のよりよい発展について考えることができるようにする。

3 検証項目

- (1) 「課題を捉える」段階において、目的に応じて分類した「課題解決系ロシート」を活用することは、学習計画を立てる上で有効か、生徒の学習計画からつかむ。
- (2) 「考えをまとめる」段階において、「情報整理シート」を活用し、ランキングを作成することは多面的・多角的に選択・判断する上で有効か、単元レポートの記述からつかむ。

4 実践の概要（9時間完了）

段階	主な学習活動
課題を捉える	第1～3時 ・ 単元で学習すべき基本的知識を得る。 ・ 中部地方は農業も工業も盛んなのかを位置や広がり、地域的特色などに着目して捉える。 ・ 学習課題を提示し、学習課題に対する今の自分の考えを明らかにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">【単元を貫く学習課題】リニア中央新幹線を建設することに賛成か反対か</div> 選択肢A「賛成」 選択肢B「反対」 ・ 自らの学習状況を把握した上で、課題解決系ロシートを活用し、学習課題を考えるための学習計画を立てる。【検証場面1】

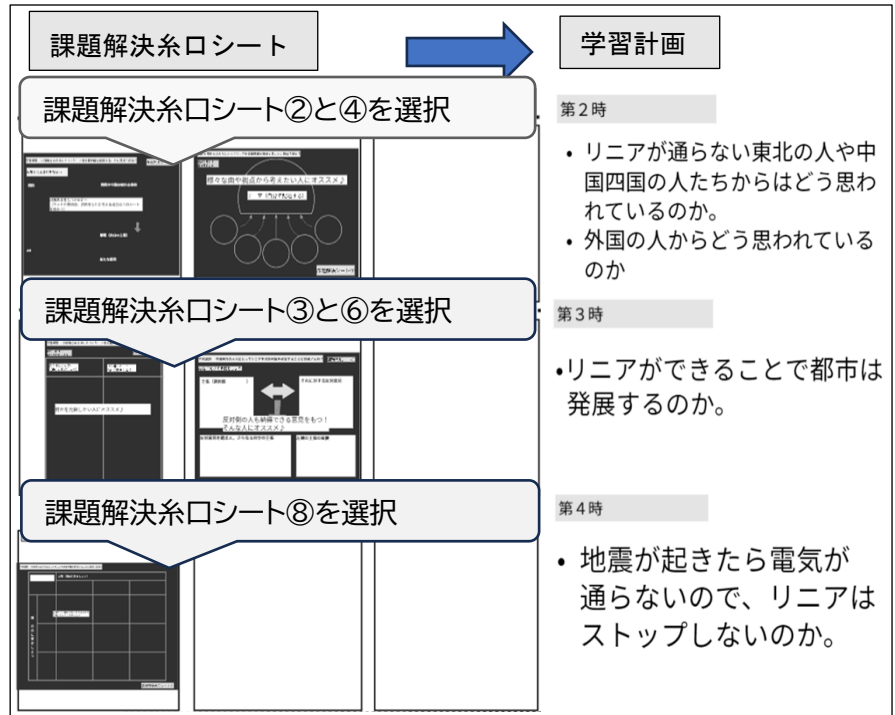
考えを広げる	第4～7時 <ul style="list-style-type: none"> 個々に立てた学習計画を基に、個別学習や協働的な学習を進めていく。 選択肢ごとにグループに分かれ、全体で討論をする。 学習課題の解決策を考える上で、影響が大きい立場を学級で共有する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 【立場】 静岡県に住む人 駅周辺に住む人 駅から離れた場所に住む </div>
まとめ	第8～9時 <ul style="list-style-type: none"> 自ら学習したことや、討論で明らかになった具体的な知識を立場ごとに情報整理シートに整理をし、どの情報が重要なのかをランキング形式で表す。【検証場面2】 学習課題に対して最もふさわしい選択肢を選び、単元レポートに記述する。

5 学習の概要

(1) 検証場面1 第3時

第3時では、学習課題「リニア中央新幹線を建設することに賛成か反対か」を考えるための学習計画を作成した。

生徒Bは、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を考えることができた**【資料10】**。しかし、自然環境のみにとどまった計画を立てていた。授業の振り返りでは、「たくさんの面から調べられるようにしたい。」と記述した。



【資料10 生徒Cの情報整理シート】

生徒Cは、「課題解決系ロシート」を基に、3時間分の学習計画を立てることはできたが、学習課題に対して、「東北や中国四国の人々はどう思うのか」などと記述しており、学習課題に沿った計画を立てることができなかった。授業の振り返りでは「様々な立場からの視点から考えていきたい。」と記述した。

(2) 検証場面1の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題を考えるために、現状の学習状況を理解し、学びたいことを取り入れながら、「課題解決系ロシート」を基に、学習計画を立てることができる。	学習課題を考えるために、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を立てることができる。	学習課題を考えるための学習計画を立てることができない。
33人		
14人 (生徒A)	19人 (生徒B)	1人 (生徒C)

生徒Aや生徒Bのように、学習課題を考えるために、「課題解決系ロシート」を基に学習計画を立てることができた生徒は34人中33人だった。これは、目的に応じて分類した「課題解決系ロシート」を作成したことで、使用目的が明確になり、生徒が学習課題を考えるための学習計画を立てることができたためであると考えられる。

一方で、生徒Cのみ学習課題を考えるための学習計画を立てることができなかった。これは、この学習課題を解決するために何を考えたら良いのか理解できなかったためであると考えられる。

(3) 検証場面2 第8時

第8時は、これまでの学習や討論で出てきた情報をまとめるために「情報整理シート」を活用した。「駅周辺の人々」「駅から離れた場所に住む人々」「静岡県に住む人々」の視点でピンク色の付箋は人々の暮らしの面、青色の付箋は産業面、黄色の付箋は都市・村落の面、緑色の付箋は自然環境面として整理した【資料11】。その後、ランキングを作成した。

生徒Bは情報を整理した後、ランキングには、駅から離れた場所に住む人々には、過疎化、静岡県に住む人々にとって自然環境の悪化、駅周辺に住む人々にとっての周辺道路への影響を挙げ、反対を選択し、単元レポートにも賛成側、反対側それぞれの意見を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを記述することができていた。

生徒Cは、「賛成」を選択し、情報整理した後、ランキングでは、駅周辺に住む人々にとっての巨大都市圏ができること、地震が起きた際に被災地に物資を届けられること、静岡県に住む人々にとっての新幹線の停車本数の増加を挙げていた【資料12】。

	賛成	選択B「反対」
駅周辺の人々の視点	企業が発展 GDPがフランスを上回る 地域ブランド 駅周辺がよくなる 会社が増える 長野や山梨が栄える 過密対策	騒音対策がされていない。 土地の値段が高くなる 山梨の会社が流出してしまう 過密化 企業の流出 農作物が減少
駅から離れた場所に住む人の視点	災害時の輸入に最適 駅から離れていても、東京から大阪までの大きな巨大都市圏ができる 早く移動できる	東海道新幹線の利用客が少なくなる 土地の値段が安くなる 農作物が減る 企業が流出 静岡が過疎化 静岡が衰退する 過疎化
静岡に住む人の視点	田代ダムやトンネルから出た水をポンプで流し込むなどして課題を解決する 災害時の輸入に最適 早く移動できる	農作物が減少 大井川による水質への影響 違う地域に人が流出している 大井川を利用した産業ができなくなる

【資料11 生徒Cの情報整理シート】

生徒A 「反対」	① 静岡に住む人にとって、残土仮置きによる災害の危険性 ② 駅から離れた場所に住む人にとって、過疎化になる可能性 ③ 駅周辺に住む人にとって、災害の際の危険性
生徒B 「反対」	① 駅から離れた場所に住む人にとって、過疎化になる可能性 ② 静岡県に住む人にとって、静岡の産業への影響 ③ 駅周辺に住む人にとって、道路の渋滞や電力消費など周辺環境への影響
生徒C 「賛成」	① 駅周辺に住む人々にとって、巨大都市圏ができる ② 駅周辺に住む人にとって、災害時に物資を輸送できる ③ 静岡県に住む人々にとって、東海道新幹線の停車本数の増加

【資料12 情報整理後、生徒A・生徒B・生徒Cが付けたランキング】

生徒Cは第7時の記述では、産業面でのみでの記述であった。また、多角的な視点は記述されていなかった。「情報整理シート」の作成後には、産業面に加えて、人々の暮らしの面を踏まえて述べることもできた。静岡の人たちや長野県、山梨県といった多角的な視点も記述することができた。【資料13】。

第7時 リニアが通ることによって大阪府から東京都まで幅広い**巨大都市圏**ができる可能性があるということが分かった。そして、海外にリニアの技術を知ってもらうことができれば、**観光客**が増加することもあると分かった。

↓
情報整理シート活用後 多面的な視点… 多角的な視点…□

そして、リニアができると大阪から東京までの**巨大都市圏**ができる可能性があり、**東京の過密化も、解消**することも期待されている。GDPがフランスを超えるという利点もあるという。
また、駅の近くの**長野県、山梨県**は**地域ブランド**の知名度が上がったり、**会社が増えたり**するという大きなメリットがあるということがある。
地震が起きた時に被災地にいち早く食べ物などが輸送できることもある。
リニアが通っていない静岡県には東海道新幹線が通っており、リニア開通後に静岡県への停車本数が増える予測が出ており、**静岡県民**は**新幹線の使用が増える**という利点がある。

【資料13 生徒Cの第7時の記述と情報整理シート後の記述の変化】

(6) 検証場面2の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題に対するそれぞれの選択肢を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができる。	学習課題に対して、自ら選択した選択肢を多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができる。	学習課題に対して、多面的・多角的に考察した上で、自らの考えを選択・判断することができない。
34人		
13人(生徒A、生徒B)	21人(生徒C)	0人

生徒A、生徒B、生徒Cのように34人の生徒が、学習課題に対して、自ら選択した選択肢を多面的・多角的に考察した上で自らの考えを選択・判断することができた。これは、「情報整理シート」で情報を整理した後、ランキング形式で三つの情報を選択したことによって、自分にとって、どの視点のどの面が判断する上で大切なか分かり、その結果、単元レポートを記述する際にも生かされ、全ての生徒が多面的・多角的に考察することができたのではないかと考える。

VIII 研究のまとめ

1 研究から明らかになったこと

(1) 社会の諸課題の解決策を考える生徒

授業研究を通して、目的に応じて分類した「課題解決糸ロシート」を基に、学習計画を立てることができた生徒は34人中33人いた。また、「情報整理シート」で情報を整理した後、ランキングを作成したことは、自分の考えが可視化され、整理することにつながり、全ての生徒にとって学習課題に対して多面的・多角的に考察する上で有効であった。

以上のことから、本研究で取り組んできた、学習計画を立てることで自ら学習を進め、その後、学習して得た知識を整理していくことは、社会の諸課題の解決策を考える上で有効であることが明らかになった。

(2) 実践後の生徒の様子

第2次授業研究後の単元「地域のあり方」では、「私たちが住む金山地区の課題を考えていこう」という学習課題を設定して学習を行った。学習計画を立てる段階で生徒Aと生徒Bは自ら課題解決糸ロシートを作成する姿が見られた。生徒Cは初めから多面的・多角的に考えるために、「若者」「老人」「働く人」や「産業面」「交通面」「人々の生活」というように、この地域に住んでいる人を分類し、さらに、様々な面から考えるための学習計画を立てていた。

このように自ら学習を進めるために「課題解決糸ロシート」を作成し、多面的・多角的に考察しようとする姿は、本研究で目指した生徒像であり、研究の確かな成果を感じることができた。

2 今後の研究に向けて

本研究では、生徒が「課題解決糸ロシート」を基に学習計画を立て、「情報整理シート」を活用することで社会の諸課題を考えようとする生徒の姿に迫ることができた。一方で、「考えを広げる段階」での活動では、途中で何を学習したら良いのか分からなくなってしまいう生徒もいた。学習計画を立てる際に、生徒が自ら作成した問いにどのように結び付くのが曖昧であったため、「考えを広げる」段階で何を学習すればよいのか分からなくなってしまったためであると考えられる。今後は、さらに実践を重ねることを通して、生徒自らが明確な問いをもつことができるための学習活動の工夫や、追究意欲を持続させるための導入段階の工夫などについて研究し、目指す生徒像に迫っていきたい。